

〈翻訳〉

ジャック=ダルクローズの リトミック音楽教育に関する現状の一考察

(2014年5月24日発行)

ルイーズ・マティユ著, 高塚桂子*訳

Un regard actuel sur la rythmique Jaques-Dalcroze

Louise Mathieu and Keiko Takatsuka

要約：20世紀初頭、エミール=ジャック・ダルクローズは、音楽を感知し生み出すメソッドとして、身体と体の動きの基本的役割を認知する「リトミック」を創り出した。今日、この概念はどのように進展したのか。現在、音楽を学ぶ上で、どの角度から、身体の動きが貢献することは扱われているのか。本稿は、このテーマに関する最近の過去数十年間にわたり発表された主な研究論文の総括を紹介している。

訳者まえがき

本稿は、インターネットのウェブサイトの Rhuthmos¹⁾ データベースに掲載されていたフランス語で発表された論文である。

‘Rhuthmos’ とは、古くは古代ギリシャの賢人たち哲学者たちが音楽とも結びつけて考えたギリシャ語の「反復する運動」が、本来の意味であるとされている。又ラテン語²⁾に由来しているとも言われているが、少なくとも現在の「リズム」の語源となったのは確かである。

このウェブサイト Rhuthmos には、広義の意味での「リズム」をテーマとして、関連する発表文献や芸術作品等が、フランス人の哲学者や哲学研究所の監修の下に、集められている。

本稿は、フランス語圏のカナダ人研究者ルイーズ・マティユ氏が、ジャック=ダルクローズの提唱した音楽教育原理に関して、特に過去30~40年間の最近の現状、経緯と動向を辿っ

た論文である。

今から遡ること100年ほど前に、ジャック=ダルクローズが、音楽から生み出した一つの音楽教育の原理が、今日なお、如何に多くの影響を与え続けているのか、そしてそれは今や音楽の分野に留まらず、如何に多方面に亘って発展してきているのか、そして又、スイス、フランスのみならず、ひいては北米のみならず、今や、例えば台湾、韓国と言ったアジアの国々とアフリカの国々にまで、如何に幅広く全世界的にリトミックが応用されてきているのか、歴大な文献を検証した上で、それらをまとめたものである。

今後の更なるリトミック研究に、多いに参考になる論文と思われるので、日本語に翻訳を試みる。

尚、翻訳権に関しては、Rhuthmos の製作者である Pascal Michon 氏の協力を得て、著者ルイーズ・マティユ氏本人の承諾を得ている³⁾。

*関西福祉科学大学 社会福祉学部 教授

¹⁾2015年7月付け

又、ジャック=ダルクローズ特有の表現や北米の音楽教育に関する用語等は、日本におけるジャック=ダルクローズのリトミック継承者の方々の訳書等を参考にさせて頂いて、なるべく同じ日本語表記をするように心がけた。

訳者 高塚桂子

目次
序文
I ジャック=ダルクローズのリトミックに関する研究の現状
II 歴史的研究
III 発展研究
IV 比較研究
V 記述に関する解釈の研究
VI 調査に関する研究
VII 理論研究
VIII 帰結
参考文献

本稿は、既に、ケベック市ラヴァル大学の音楽教育研究第 28 号に発表されている。

著書公開を好意的に許可して頂いたルイズ・マティユ氏と音楽教育研究誌にお礼を申し上げる。しかしながら、全ての著作権は両者に帰属している。

- Rhuthmos より

序 文

1865 年生まれで 1950 年に没するエミール=ジャック・ダルクローズは、多彩な才能の持ち主だった。ピアニストで、作曲家で、演出家でもあった彼は、又 20 世紀における偉大な教育者の一人でもあった。彼の唱えた理念は、何人もの芸術上の信奉者に強烈な影響を与えた。モダンダンスの先駆者としても、舞台上の演技と近代の舞台演出においても、彼の与えた影響は計り知れない。

1892 年に、ジャック=ダルクローズは、スイスのジュネーヴ音楽院教授に任命された。丁度

この時期に、彼は、それまでの音楽学習と教育法のプログラムを、余りにも断片的であまりにも頭脳的であり、学生の感覚、感情とかけ離れているとして、改善する必要性を感じていた。それゆえ、彼は、人間の全てを基盤として、調和のとれた人間の能力全ての発展に焦点を合わせた音楽教育研究法を考えるように心がけた。それが、20 世紀にジャック=ダルクローズのリトミックが生まれた所以である。(これ以降はリトミックと記述する) さて今日、この理念は、創設者の考えをそのまま継承しているのだろうか。探求者達は、リトミックにどの観点で関心を示しているのだろうか。音楽を学ぶ時に、身体の動きはどのように貢献すると論じられているのか。本稿は、過去数十年間における、リトミックに関する主要な研究論文の総論を示したものである。

I ジャック・ダルクローズのリトミックに関する研究の現状

リトミックを扱った文書に関する文献研究によって、論文と報告書と、以下のデータベースの最近の学術目録が作られている。データベース：Music Index, Education Resources Information Center, ProQuest Dissertations and Theses, Répertoire international de littérature musicale, PsycInfo, Systeme universitaire de documentation。これらのデータベースには、膨大な数のジャック=ダルクローズに関係する研究論文が含まれていて、しかもドイツ語、ポルトガル語、イタリア語、オランダ語、ハンガリー語、スペイン語、クロアチア語、ポーランド語、スウェーデン語、アフリカの諸言語、ロシア語、チェコ語と日本語で書かれていて、そして勿論英語とフランス語でも書かれている。その多くが、ジャック=ダルクローズ自身からの引用を含んだ論文、あるいは、リトミックの原理の特徴と、リトミックが現在まで様々な分野に及ぼしている影響を、簡潔な方法で表現した論文である。

本稿では、リトミックに関して、特にフラン

ス語と英語で書かれた論文文献のみ取り上げている。1966年～2006年の間に出版されていて、34の論文と、6の研究報告書と、29の記事を含む。興味深いことに、これらの研究のうち、78、2%が1985年から2006年の間に発表されていて、しかも研究と調査の領域も、音楽、演劇、ダンス、映画、音楽教育、身体教育、専門教育、セラピー、老人学と幅広い。100年以上経たにも関わらず、リトミックが、今日でも、研究者たちの現代的テーマであり続けているのは明白である。

本稿では、音楽教育の分野において考察した研究論文にのみ、関心を寄せている。研究者たちに考察されたリトミックの様々な観点にのみ特別に絞って、考察するように試みている。

II 歴史的研究

リトミックの発達の歴史と、公立学校³⁾の音楽プログラムにリトミックが及ぼした影響の歴史が、研究者達の注意をとりわけ引いている。

なかでも、Becknell (1970) は、合衆国で、学校を設立して、リトミック科と、リトミックで構成された大学のプログラムに貢献したヨーロッパのリトミック指導者たちの貢献を研究している。Becknell は、Music Educators National Conference (全米音楽教育者協議会) と Music Teachers National Association (全米音楽指導者協会) の学会において発表されたデモンストレーションと講演のお陰で、アメリカの音楽教育者たちはリトミックについて知り得て、自分たちの実践に徐々に組み込んでいけたのだと述べている。彼は、数々の小学校用の歌の教科書に、ダルクローズの原理の影響があると言及している。

一方、Campbell (1991) は、合衆国において、小学校の音楽プログラムの中に、「身体の動き」が、漸次的に中心的役割を占めるようになると認識されたのは、19世紀の終わりから1930年代の間にかけてであると証明している。

彼女によると、Dewey により推奨された新しい教育学とジャック=ダルクローズの教育方針は、子どもの能力、そこには子どもの表現能力と創造能力も含まれる全ての能力の発達を目標とした音楽研究プログラムの推敲においてと同様に、子どもを中心とした実践的教育の発展に貢献したと指摘している。

最後に、Revkin (1984) は、20世紀初頭におけるスイスのフランス語圏の州⁴⁾でのリトミックの発達と影響をたどっている。ダルクローズの業績は、その当時のスイスで支配していた哲学と学習理論⁵⁾に関連して展開されている。スイスのフランス語圏と、合衆国における音楽教育の歴史上のリトミックの寄与を明らかにする上に更に、Becknell, Revkin と Campbell は、1970年または1984年または1991年に、それぞれが論文を発表した当時、公立学校の音楽プログラムで、ダルクローズの音楽教育の原理が、中心的位置を占めていたことを強調している。このことは、20世紀の最後の30年の間に、リトミックが恒常的に目に見えて存在していたことを暗示している。

III 発展研究

ジャック=ダルクローズの音楽教育の思想と教育学原理に基づいた研究プログラム、教育法と教育活動のそれぞれの発達は、研究者たちの興味を別の領域にも広げている。

2003年、Chung は、台湾の公立校で、初心者のための音楽プログラムを発達させる研究の一環として、台湾の民族音楽教育の中に、どのようにダルクローズのテクニックを組み込み適用したのか明示した。

2005年、Jeong、彼女はと言えば、ジャック=ダルクローズの方法論が、自国の現代音楽教育の発達に繋がると考えて、韓国の幼児施設の音楽教育用カリキュラムを発展させた。実際、彼女は、韓国の人々にとって、自国の伝統音楽の特徴を尊重することのできる教育法が必要であったと説明している。

又一方で、研究者たちは、器楽の音楽教育に関する分野でも、リトミックに興味を示している。

例えば、Jacobson は、1989 年に、北米でも良く知られていて使用頻度の高いピアノメソッド（教則本）の一つである Frances Clark と Louise Goss による『The Music Tree』に関連した、302 もの一連の活動を含めたカタログを作り上げるに当たって、教則本メソッドの 3 つの部門として－リトミック、ソルフェージュと即興演奏－を用いている。

1994 年に、Nalbandian は、プロのピアニスト養成クラスにアンケート調査をして、初見、移調、即興演奏とオーケストラ譜の譜読みの有無を確認した上で、ダルクロワーズのメソッドの原理とテクニックを強調した一連の活動と教育戦術を開発した。

最後に、2002 年に、Jang が、初歩とその次の中間レベルの生徒たちが、様々な音楽概念の知識を段階的に修得して、独自のスタイルで自由に即興演奏できる能力を身につけて上達するための手助けとして、72 のピアノのための作品目録を作成した。これらの目標に到達するために、Jang は、作品ごとに、ジャック=ダルクロワーズの教育法アプローチに適したリトミック、ソルフェージュと即興演奏を提案している。

IV 比較研究

過去数 10 年間に、何人かの研究者たちは、リトミックと他の音楽教育システムの比較をしている。

1989 年に Comeau は、ダルクロワーズ、オルフとコダーイによる、3 つの教育的アプローチの哲学的心理学的基礎理念の分析を行いつつ、学校教育カリキュラムの分析も行った。彼は、それぞれの独自の特徴を叙述して、それぞれの違いを際立たせようと努めた。

1990 年に、Eterman も同じアプローチを考察したが、今回はシュタイナー理論とウォルドー

フスクールでのその実践に関連づけている。

Campbell は 1989 年に、学校の授業でリトミックをより多く使用するために、ゴードンの音楽学習理論と比較をした。その研究の中で、Campbell は、二つのシステムの相互性と確固とした共通性が、音楽の真の評価と理解に貢献する、何回もの反復により身につける教育法の実践を可能にすると支持している。

最後に 2005 年に Phuthego は、アフリカの共同体で、音楽の学習⁶⁾と教育に使われているものと、ダルクロワーズ的アプローチを比較している。彼は、いずれにしても両者共に、使われているステップは似ていて、音楽の技能としての敏捷さの発達を目指している点においても同じであると考えている。彼は、とりわけ、聴覚、視覚、運動覚（筋肉運動感覚）の熟練に結びつく音楽遊びを使うこと、並びに、動きの中心的役割とオートマティズム的芸術の創造に言及している。

V 記述に関する解釈の研究

過去数十年間、研究者たちの興味を引いた他の研究調査の領域は、音楽性と聴覚リズム的な敏捷さの発達、並びに音楽の知覚と理解に関するリトミックの影響である。

1982 年に Joseph は、幼稚園児に対して、知らない音楽作品のリズムモチーフを見分ける能力と、並びに、八分音符遊びで即興しながらモチーフを使う能力に関して、3 つのタイプの教育的働きかけを計測した。つまり、一つ目の幼児のグループは、即興活動を含むリトミック講習を受ける。二つ目のグループは即興活動のないリトミック講習を受ける。三つ目の子どもたちのグループは、ダルクロワーズのアプローチを使わない指導者による音楽の講習を受ける。リトミックにより構成された講習を受けた子どもたちが、知らない作品の中にあるリズムモチーフを認識してそれに反応する能力テストが他より良い結果となった。更に、即興活動を含むリトミックの講習に参加した子どもたちのグルー

ブが、即興演奏でモチーフを使用することに焦点を置いたテストでは、最も高い得点を獲得した。

1995年に、Roseは類似した研究をしているが、それでは、幼稚園児、第1学年生⁷⁾と第2学年生を対象として、「鼓動的音楽の脈動」を保つ能力に関して、リトミックによる効果を見ることを目的としていた。このRoseの研究は、Josephのものと結果は似通っていた。つまり、リトミックのレッスンを受けた子どもたちのグループが、リトミックの講習を受けなかったグループより、「鼓動」⁸⁾の音楽の脈動を保つ能力を測るテストにおいて勝っていたのは歴然としていた。

又Blesedellとしては、1991年に、小さい子どもたちのリズム感の能力の発達に関するダルクローズのメソードの影響に論考を発表している。彼女は、3歳児から4歳児の学齢期以前の子どもたち50人ほどの身体の動きと、又同様に、演奏する際の影響とリズム感の能力に関する二つのタイプの教授法、つまりジャック=ダルクローズによるアプローチとLabanによるアプローチの比較をした。その結果、AudieからGordonまでのテストに、そして二つのグループで教育を受ける前と後に、はっきりとした差が観察されている。リズム感の能力の発達には、身体の動きの教育が、ポジティブな効果があり欠かせないと証明されていることになる。但し、Labanのグループの子どもたちは、動きに対する能率に関してははっきりと優勢で、ダルクローズのグループの方は、リズムの能率についてははっきりと優勢な成果をもたらしていた。

もう一つ別に、ここに記載する価値のある研究と言えば、それは1982年にCrfumplerが、76人の第1学年生の音楽の旋律の発達におけるリトミックの影響を、定義しようと着目した

ことである。結果は、リトミックの講習を受けたグループには、テスト前とテスト後に、はっきりとした改善がみられたが、受けていないグループの方にはみられなかった。

リトミック活動は、音楽経験のないグループの音楽の授業に加えられるものであるだろう。

VI 調査研究

前述した幾つかの記述による解釈研究によって、子どもたちに対して、音楽の敏捷さの発達には、リトミックの貢献が欠かせないと証明されたことを紹介してきた。しかしながら、研究者たちは、大人に向けられたリトミックに対しても考察を示している。ここではむしろ、なによりもまず学習者の音楽経験の有無を知った上で、予備研究の形を取り考察は試みられている。

1995年に、とりわけ、Alpersonは、4人のリトミック教師による4つの成人の学習者たちのクラスを観察した。彼女は4人の教師と一緒に、各グループの受講者たちにインタビューを行った。彼女の狙いは、リトミックの神髄とも言える方法、つまりこの大人の学習者たちと教師たちによる、両者の合体によるアンサンブルによって体験されたものを、理解するためであった。この研究結果は、3つの主な観察グループに分類することが出来た。まず第1に、リトミックによる教育法は個人を中心として考えられていて、そして自律性を重んじている。まず指導する側と指導を受ける側のコミュニケーションは音楽により行われる。そして、指導者と受講者の両者の間にある相互作用は、Alpersonが「indirect teaching」（非直接的指導）と「non-verbal learning」（言葉の表現によらない学習）と呼んでいる漸進的に時間の隔たり⁹⁾をとることによって、特徴づけられている。成人の学習は、競争はなくて協力して助け合う環境で行われる。第2に、リトミックは、習得の2つの手法：つまり頭脳と感覚が構成要素である作業過程によって特徴づけられる。この自発的で循環

するプロセスは、それを行動として示そうとする一つの概念から生じている。第 3 に、リトミックの授業は、Dewey や、Langer や、Rogers が論じているように、最終教育目標として、美的体験の実現を可能にすることができるとしている。

Ⅶ 理論研究

前述した、何よりも実験に基づく研究と並行して、心理学、神経学、哲学と同じレベルで変化に富んだ教科から生じている理論に照らしたリトミックの研究も行われている。

2003 年に、Brice は、Gardner の『Theorie des intelligences multiples』(多方面に亘る知性の諸理論)の観点から、再びダルクローズ的アプローチを考察している。Brice は、ダルクローズと Gardner 両者共に、学校で論理数学論証の発達に認められていた優位性を、知性の『一次的』視点であるとの理由で反対したと明言している。彼女によると、2 人のこの教育者は、人間個人の数次元的潜在能力を認識していて、それを巧みに利用するように努めたとしている。子どもたちに行われたリトミックレッスンを描写した分析の後に、Brice は、Gardner の知性の諸理論を基盤としながら、リトミックレッスンの際に遊びとして発動される知性の多種多様なフォームを、確認している。

2005 年に、Seitz は、音楽表現に関して、生理的かつ神経学的な面での基礎を扱っている最近の記述書の書評に取りかかる。彼女は、『音楽に関連する重要な全要素—つまり、旋律、旋律曲線、リズム、フレーズ、カデンツァ、アクセントと、そして、アゴギクでダイナミックで調和のとれた超微細なニュアンス—は、身体の成長¹⁰⁾に影響されている』と証明している；それこそが解決策だと (431 ページ)。Seitz の論文では、音楽を感知する時、つまり、声により演奏される時であれ、あるいは又は楽器により演奏される時であれ、聴力と身体を動

かす原動力のシステムがとりわけ切り離せない」と強調している。彼女によれば、これこそが、今日の音楽家、音楽教育家と心理学者にとって、身体と身体の動きの中心的役割についてのダルクローズの独創的なコンセプトが、極めて重要である所以であるとしている。

2001 年 Juntunen と Westerlund は、ジャック=ダルクローズの意図と、Dewey、Elliot と、Regelski の意図するものとの関係に鋭く光を当てている。

中でも、Juntunen と Westerlund の 2 人は、ジャック=ダルクローズの説く教育とは、個人の行動と経験の中に根付くものでなくてはならないと想起させてくれる。実際、ジャック=ダルクローズにとって、音楽の理解は、行動から生じていて、そして、感覚器官の体験において、それが定着している。

彼女は、更に、ジャック=ダルクローズと同じように Dewey は、理論は実践と離して考えるべきではなくて、規則とコンセプトの習得には、そこにもたらされている行為の体験が先行していなければならないと強調していると考察している。

2004 年に、Juntunen は、ジャック=ダルクローズの体験的発見とメルロ=ポンティ (Merleau-Ponty) の現象学の間にある相互性を留意する為に、人間を取り巻く世界に対する知覚とその理解力においての身体の本質的な役割に関して、Hyvonen と足並みを揃えている。この 2 人の思想家の理念を、デカルト的の二元論に反対している人々に引き続いて位置づけて、彼女は、ジャック=ダルクローズとメルロ=ポンティは 2 人共に、身体と精神は切り離せないと考えていると繰り返し表現している。メルロ=ポンティにとって、「humans come to know the world by 'being-in-the-world' through the body」¹¹⁾であると彼女は記述している。従って、メルロ=ポンティでは、—全てがまるで、音楽の習得に関するダルクローズのコンセプトの場合と同じように

－身体は認識の構成物のように知覚されている。以上の研究者たちの見地よりすれば、メルロ=ポンティ式理論の枠で、リトミックを検証することが可能になる。実際、リトミックが、まさしく「*a bodily way of being-in-sound*¹²⁾」にその存在理由がある以上、音楽に属する認識が具象化されて、そしてそれは個の人間的な経験の上に打ち立てられているのであるからだ。

これ以外にも、2004年に発表された別の研究では、Juntunen は、デカルトの身体と精神の二元性に反論する神経学者の Damasio の論文に立ち戻っている。Damasio は、実際のところ、知は我々の体の中を貫き、我々の身体が引き起こしている感覚（センセーション）を貫き、即ち我々の存在自体が感じているという自覚の中に打ち立てられていると考えている。

ついに、2001年の Urista にならって、Juntunen と Hyvonen は、音楽の具象化は－リトミックにより実践されるように－おそらく音楽に関する理解の身体的隠喩のように見られると強調している。『隠喩メタファー』の概念は、Lakoff と Johnson によると、知識を伝達する具として、人間が意義深い経験をものとして表現するために使用するプロセスとして、取り入れられたと考えられている。

ジャック=ダルクローズがちょうど比喩に富んだ表現で言っていたのではないだろうか：『あなたの身体が音楽になっていくように』と。

それに関して、1992年に、音楽教育におけるリトミックと身体の動きの役割について、Young により導かれた考察は、言ってみれば、このダルクローズのメタファーの典型的な研究である。実際、ダルクローズのアプローチを書き表しながら、Young は、如何にして身体の動きが－それが行われたものであれ想像のものであれ－音楽の巧みに逃げては消える瞬間的な性質をフォームで表現するか、そして、それが如何に構造を具現化して、それによって表現力

豊かな美質を明らかにできるのか考察している。Young は、音楽は、身体の中に植え付けられる時にしか、我々に真の姿を見せないと考えている。

VIII 帰 結

ここ数年間に発表された研究にざっと目を通しただけでも、20世紀の始めに、ジャック・ダルクローズにより推奨された理論が、今日まだ現代的意味を持ち、実践の面では、世界中の様々な音楽研究プログラムの中に、リトミックが真の意味で存在し続けていることは疑う余地がない。幾つかの研究では、リトミックが、音楽性と器乐的な敏捷さの発達と同様に、人間の機能全体の発達に関しても、ポジティブに寄与していると指摘されている。又別の研究者たちは、リトミックが、指導者が科学に基礎を置き、子どもの行動と正確な特性を中心に置く教育が必要であるとしている『新しい教育法』と親子関係であるとみなしている。1996年の Gauthier によれば、リトミックの教育ヴィジョンが、20世紀を突き進み、現在でも最新の実践教育に原理として役立っていると強調している。

更に又別の論文では、リトミックは、現代の教育学の土台として役立っている理論への関係性に注目している。

最後に、人文科学ではなくて、むしろ神経科学に由来する新しい研究が、ジャック=ダルクローズが20世紀の始めに提出した発言の効力を、今日証明しようと努力していると記しておくことにする。彼は既に1924年に次のように言っているのではないか：『我知り考える。なぜなら我感じ体験するから』¹³⁾。

これらの意図されたものと、現代の神経学者 Damasio の考えの類似関係には、驚くべきものがある。実際、人間の脳と身体の残りの部分は、その一貫性が生化学的回路と相互的神経制御によって安定されている組織から構成されていることを忘れてはならない。そして、身体と

精神が切り離せないと強調して、Damasio は次のように述べている。：『感情の知覚は、人類が何千年も前から呼んでいるものを根拠としている、それは、魂あるいは精神（エスプリ）と呼ぶ』¹⁴⁾

要するに、研究者たちにより注がれたリトミックに関する多次元的眼差しは、その豊かさや教育的価値や又明白な現代性を浮き彫りにしているのだ。『リトミック ジャック=ダルクローズ』と題される Marie-Laure Bachmann の、無視することの出来ない著書の中に、それが書かれているように。音楽による音楽のための教育：『それが何も、他よりも古いからではなくて、一つのメソッドが勝っているからでもなくて、又あるいは市民権があるというのでもない。それは、今日でも生き生きと鮮明であり、そして、人間の現在にと同じくらい人間の未来にも向けられているからである。』と。(40 ページ、1984 年)

参考文献

Alperson, Ruth (1995). *A qualitative study of Dalcroze Eurhythmics classes for adults*. Ph. D., New York University.

Becknell, Arthur Francis, Jr. (1970). *A history of the development of Dalcroze Eurhythmics in the United-states and its influence on the public school music program*. Ed. D., University of Michigan.

Blesedell, Darla S. (1991). *A study of the effects of two types of movement instruction on the rhythm achievement and developmental rhythm aptitude of preschool children*. Ph. D., Temple University.

Brice, Mary (2003). *Pédagogie de tous les possibles. La Rythmique Jaques-Dalcroze*. Mémoire d'études, Institut Jaques-Dalcroze. Genève: Éditions Papillon.

Campbell, Patricia Shehan (1989). *Dalcroze recon-structe: an application of music learning theory to the principles of Jaques-Dalcroze*. *Readings in Music Learning Theory*, 301-315.

Campbell, Patricia Shehan (1991). *Rhythmic movement and public school music education: conservative and progressive views of the formative years*.

Journal of Research in Music Education, 39(1), 12-22.

Chung, Szu-Ming (2003). *A music program for grade one based on the new Music Curriculum Standards (1993) in Taiwan*. Ph. D., Texas Tech University.

Comeau, Gilles (1989). *Analyse comparative de trois approches d'éducation musicale: Dalcroze, Orff et Kodaly*. M. A., University of Ottawa, Canada.

Crumpler, Sue E. (1982). *The effects of Dalcroze Eurhythmics on the melodic musical growth of first grade students*. Ph. D., Louisiana State University and Agricultural & Mechanical College.

Damasio, Antonio R. (1995). *L'Erreur de Descartes. La raison des émotions*. Paris: Odile Jacob.

Eterman, Linda Ann Ledbetter (1990). *An approach to music education based on the indications of Rudolf Steiner: Implications for grades 1-3*. M. A., The University of British Columbia, Canada.

Gauthier, C. (1996). *De la pédagogie traditionnelle à la pédagogie nouvelle, sous la direction de C. Gauthier et M. Tardif. La pédagogie. Théorie et pratiques de l'Antiquité à nos jours*. Gaëtan Morin: Montréal.

Jacobson, Jeanine Mae (1989). *A catalogue of movement-based instructional activities for beginning piano students correlated to 'The Music Tree' series by Frances Clark and Louise Goss*. D. M. A., The University of Oklahoma.

Jang, Nancy Sung-Won (2002). *A personal collection of piano repertoire and pedagogy, based on and adapted from the work of Emile Jaques-Dalcroze*. D. M. A., University of Washington.

Jeong, Jae-Eun (2005). *Adaptation of Dalcroze methodology to the teaching of music to kindergarten students in Korea*. D. M. A., Boston University.

Joseph, Annabelle Sachs (1982). *A Dalcroze Eurhythmics approach to music learning in kindergarten through rhythmic movement, ear-training and improvisation*. D. A., Carnegie Mellon University.

Juntunen, Marja-Leena (2004). *Embodiment in Dalcroze Eurhythmics*. Thèse de doctorat. Faculty of Education, Department of Education Sciences and Teacher Education. University of Oulu, Finland.

Juntunen, Marja-Leena et Leena Hyvönen (2004). *Embodiment in musical knowing: How body movement facilitates learning within Dalcroze Eurhythmics*. *British Journal of Music Education*,

- 21 (no 2), 199-214.
- Juntunen, Marja-Leena et Westerlund, Heidi (2001). Digging Dalcroze, or, dissolving the mind-body dualism : philosophical and practical remarks on the musical body in action. *Music Education Research*, 3, 2, 203-214
- Nalbandian, Melanie R. (1994). *Application of the Dalcroze philosophy of music education to the music major piano class*. D. M. A., University of Washington.
- Phuthego, Mothusi (2005, décembre). Teaching and learning African music and Jaques-Dalcroze's Eurhythmics. *International Journal of Music Education*, 23 (no 3), 239-248.
- Revkin, Linda Kyle (1984). *An historical and philosophical inquiry into the development of Dalcroze Eurhythmics and its influence on music education in the French cantons of Switzerland*. Ph. D., Northwestern University.
- Rose, Sarah Elizabeth (1995). *The effects of Dalcroze Eurhythmics on beat competency performance skills of kindergarten, first-, and second-grade children*. Ph. D., The University of North Carolina at Greensboro.
- Seitz, Jaya (2005, octobre). Dalcroze, the body, movement and musicality. *Psychology of Music*, 33 (4), 419-435.
- Stone, S. (1986). An analysis of instructional procedures in a college-level Dalcroze Eurhythmics class. *British Journal of Music Education*, 3 (2), 217-237.
- Urista, Diane Jean (2001). *Embodying music theory : Image schemas as sources for musical concepts and analysis, and as tools for expressive performance*. Ph. D., Columbia University.
- Urista, Diane J. (2003). Beyond words : The moving body as a tool for musical understanding. *Music Theory Online*, 9(3).
- Young, Suzan (1992). Physical movement : Its place in music education. *British Journal of Music Education*, 9(3), 187-194.
- ©Recherche en éducation musicale, 2010

[1] Je tiens à remercier Marie-Claude Dumoulin et Ariane Nantel, auxiliaires de recherche qui ont collaboré à cette recherche documentaire.
(この参考資料を集めるにあたって協力してくれた Marie-Claude Dumoulin と Ariane Nantel の 2 人の助

教員に感謝の意を表します。)

訳者あとがき

本稿の翻訳を試みることによって、ジャック=ダルクローズのリトミック音楽教育の原理とその現況を、訳者自身が再認識することができるのではないかと考えた。

そもそも訳者がフランスで音楽教育を受けた1980年代後半に、既にリトミックは、ヨーロッパの中でも特にフランスでは、音楽そのものの中に深く浸透していて、音楽教育と切り離せないものと認識されていた。訳者日本帰国後の現在、保育士養成校でピアノとその他の音楽科目を教えるようになり、これまでと違い音楽の知識と実力のレベルの違う学生達、特に音楽未経験の学生にも楽器を教えるようになり、改めてリトミック音楽教育の必要性を強く感じるようになった。そこで、現在のリトミック音楽教育の現況はどこまで進歩と発展を遂げているのか興味が湧いて、本稿を翻訳することとしたのである。

その結果、リトミックが音楽の分野からその枠を拡げて、科学、哲学と言った幅広い他の分野にまで影響を与え続けていることと、更に、リトミックが現在及び未来へ向けて恒久的に発信されていることを、これほどまで理解できるとは思いも寄らなかった。

最後に、本稿の翻訳権の取得に関して協力を惜しまなかったウェブサイト Rhuthmos の Pascal Michon 氏に感謝の意を表すると共に、翻訳権を快諾して頂いた本稿の著者である Louise Mathieu 氏に、深い敬意と感謝の意を表す。

筆者が対象とした考察論文の数が豊富な上に多岐に亘っている点と、それらを各項目別に分類して分析している点と、特に北米を中心とした視点ではあるが、リトミックに関しての今後の研究の指針としての方向付けを示してくれた点に関して、高く評価したい。

注

- 1) フランス人哲学者の Pascal Michon (1959-) によって立ち上げられたインターネットのサイトで、「リズム」に関する科学、哲学と芸術関係の研究を集めた国際教材基盤であると銘打っている。2015 年 6 月現在、236 名の研究登録者がいる。
- 2) ラテン語では ‘Rhythmo’ (音楽やスピーチの調和のとれたリズム) が近い言葉と思われる。
- 3) フランス語で表現されているが、ここでは、北米の学校教育制度の英語表記による「パブリックスクール」を意識していると思われる。フランスでは、大多数が公立による学校制度のために、あえてこの表現はしない。
- 4) ジャック＝ダルクローズは、スイスのフランス語圏出身である。
- 5) ジャック＝ダルクローズの母は、ペスタロッチ主義に基づく音楽教師であった。
- 6) 特に初歩のための「学習」を指している。
- 7) この学年の表現の仕方も、フランス語で書かれているが、北米における小学一年生を指している。
- 8) 北米やヨーロッパでは、音楽の演奏には、心臓の鼓動と同じリズム感が必要と言われている。日本のリトミック研究者の方によれば、「鼓動的音楽の脈動」と訳されているので、本稿でもそれに准じている。
- 9) 「音楽の流れ」の意味であると考える。
- 10) 詳細は 431 ページ参照されたい。
- 11) 詳細は 200 ページを参照されたい。又この文章を、著者は英語で原文のまま抜き出しているため、本稿の翻訳でも同様の扱いとする。
- 12) 2004 年「抽象」より引用されている。Juntunen, ‘Abstract’より

- 13) 7 ページ
- 14) 13 ページ

日本語訳のための参考文献

- Bailly, ‘Dictionnaire Grec-Français’ Paris, Hachette, 1929.
- Carlston T. Lewis, ‘A Latin Dictionary’, Oxford, 1966, p.1594.
- Pascal Michon, https://fr.wikipedia.org/wiki/Pascal_Michon (参照 2015-6-15).
- Rey Alain, ‘Le Micro-Robert 2 Dictionnaire de culture générale’, Paris, 1990.
- Rhuthmos, 「リズムに関する教材的国際基盤」、http://www.rhuthmos.eu/spip.php?article_1186 (参照 2015-5-20).
- フランセス・ウェーバー・アロノフ著『アロノフ先生のリトミック教室』板野平監修、ドレミ楽譜出版社、2007.
- 小村美実監修、高野雅子編著『表現 幼児音楽Ⅱ』、保育出版社、2007, pp.62-66.
- エミール・ジャック＝ダルクローズ著『リズムと音楽と教育』板野平訳、全音楽譜出版社、1975, 1-37.
- チョクシー、エイブラムソン、ガレスピー、ウッズ共著『音楽教育メソードの比較』板野和彦訳、全音楽譜出版社、1986.
- エリザベス・バンドウレスパー著『リトミック教育のための原理と指針 ダルクローズのリトミック』石丸由理訳、ドレミ楽譜出版社、1996.
- 『仏和大辞典』伊吹武彦編、白水社、1981.
- 『ロワイヤル仏和中辞典』旺文社、1985.
- 『例解国語辞典』時枝誠記編、中教出版、1967.
- 『哲学事典』林達夫監修、平凡社、1971, p.1462.